

第八章 方言と外來語

第一節 總論

外來語とは、外國起原の言葉にして、國語に輸入され、一般に使用されて、外國語としての感じを失つたものを言ふ。だから、學問・技術・宗教等の術語の如く、その専門家の間にだけ使はれるものは、その使用の度數がいに頻繁であつても、之を「外來語」とは認めない。又、使ふ人も、聞く人も、外國語としての感じが生ま／＼しい間は、之を「外來語」とは認めない。是等は「外國語」である。

外來語は、原則として、文化の高い所から文化の低い方へ流れて來るものである。日本語の中に、英語・支那語・ポルトガル語・オランダ語・梵語が甚だ多く、朝鮮語・臺灣語・アイヌ語・琉球語が甚だ少ないのは是がためである。逆に、アイヌ語や琉球語の中には、日本語が非常に多い。もつとも、琉球語は、日本語と祖先を同じくする姉妹國語であるが、室町時代・元祿時代の京都語を琉球語に見出すのは、これは明に交通によつて、もたらされたもので、外來語である。一體、外來語は、交通に

よる單語の貸借を意味するだけで、文法組織・音韻組織の親疎とは無關係であるから、語族の異同・親疎は念頭に置く必要が無い。日本語と英語の様に、全く語族の違つたものの間にでも、交通さへあれば單語の貸借が行はれる。比較言語學と外來語學とは別の範疇に屬する。

外國語は、多くは、物と一所に輸入される。外國から珍奇な品物がもたらされた場合に、それを親た人は、必ず、先づ「これは何といふものでせう」と、その名を問ふだらう。その名が甚だしく覚え辛い場合は、此方で新たに和名を工夫する事もあらうが、さもない限り、原語を、そのまゝ、又は多少の訛を以て採用する。これが外國語輸入の最も普通の場合である。だから、外國語は、名詞、特に形ある物の名に多い。動詞や形容詞を外國語で説明しようとする人があるが、それは信用し難い。前田太郎氏の「外來語の研究」には、南蠻語七十八語を録してあるが、その内別を見るに、(一)器具十七語、(二)服飾十六語、(三)飲食物十三語、(四)雜十一語、(五)宗教九語、(六)動植物八語、(七)藥四語の順となる。宗教語類を除けば、すべて目に見える物の名ばかりである。殊に、器具・服飾・飲食物の三だけで、全體の六割を占めて居る。前田太郎氏が古文獻について、外來語の使明される頻度を調べたのによると、(一)布帛、(二)飲食、(三)器具、(四)宗教、(五)動植物、(六)藥種の順である。これは、例へばタバコが十回出て來ると十として計算するといふやり方で、私のとは材料も方法も違

ふが、結果だけ見ると、布帛・飲食・器具の三が多い點に於て一致する。

次に、古賀十二郎氏の「長崎市史」風俗篇中のポルトガル語系の外來語の内容を調べてみると、宗教語一六九語、器具二十一語、服飾十九語、飲食物十四語、固有名詞十一語、動植物十語、藥五語、雜三六語である。宗教用語が驚く程多いが、これは昔の切支丹書に現れた外國語を洩れなく集めたと見える。長崎人が一般に使つたものではない。従つて、長崎方言とは關係の無いものである。本山桂川氏が大本教の用語と丹波綾部の方言とは別物だと喝破した通りである。これは外國語であつて、外來語ではない。さて、キリシタン用語を別にすれば、器具・服飾・飲食物の順序で、前の調査とよく一致する。

次に、外來語をその國籍によつて分類すれば、どうなるか。「言語」の附録には次の様にある。

梵語	一二〇	唐音語	九六
蘭語	八五	英語	七三
洋語	五五	韓語	二三
蝦夷語	二〇	西班牙語	一七

南蠻語

一七

葡萄牙語

一二

佛　　語

一二

羅　　旬　語

一〇

琉球語

九

其　　他

一五

南蠻語・蘭語・スペイン語・ポルトガル語・ラテン語を合計すれば百四十一語となり、梵語と唐音語との合計に次ぐ事になる。英語やフランス語は近年導入したものであるから、こゝでは問題の範圍外に置く。西洋の國語は、共通の祖語から出て、互に似通ったものが多いので、外來語の源を突き留める事は容易でない。大槻博士は、原語を、主として、オランダ語に求めたが、近頃の研究によれば、オランダ語よりもポルトガル語の方が多い。前田太郎氏によれば、ポルトガル語三十六語、オランダ語三十七語、ラテン語四語、スペイン語一語で、ほぼ同數となるし、古賀十二郎氏によれば、長崎方言中の外來語は、唐音語五九三語、ポルトガル語二九四語、オランダ語二三五語、スペイン語九語となり、本山桂川氏によれば、唐音語一五〇、ポルトガル語六六、オランダ語四四、其他十二となり、共に、ポルトガル語の方が多い。ポルトガル人は、オランダ人よりも先に渡來したのだから、ボ語の方に分があらう。いづれにしても、「言海」の蘭語八五、ボ語十二は不當である。

外來語は、南蠻語でも、支那語でも、朝鮮語でも、先づ長崎に上陸し、長崎を中心として擴まつたものである。この點に於て、他の言葉が京大阪を中心として擴まつたのとは大いに趣を異にして居る。外來語にも分布論は成立つが、その發展の狀態は、他の言葉とは違ふ事に注意して、特別扱ひにする必要がある。もつとも、京都以東に於ける分布には、京都の力があづかつて居るはずで、この點他の言葉と變りはないが、少なくとも、九州一圓は、外來語に關する限り、長崎からの直輸入であつて、京阪語はあづからぬと見てよい。

第二節 南　　蠻　　語

主として、ポルトガル語とオランダ語である。室町時代末期から徳川時代初期にかけて輸入されたものである。

ボウブラ (南風)

ポルトガル語 *abochoa, abochoa* の訛。九州全部・四國全部・中國全部・志摩・能登・加賀・秋田にこの語がある。昔は京・大阪・江戸でも使った。ボーフラ (江戸・中國・四國) ボーピラ (能登) ボーブナ (佐賀・長崎) ボーブリ (備中) ボーボラ (石見・山口) ボーラ (石見) ボーラン (廣島・伊

豫) ボブラ (秋田・香川・土佐) ボブラ (加賀・土佐・豊後・島原・薩摩) ボボラ (秋田) ボンブラ (石見) ボンボラ (秋田・石見) 等と言ふ所もある。加賀のボルバ、長崎縣宇久島のボリバは、ボブラの子音轉置である。油がアルバとなり、カブラがカルバとなるのと同じ。又、折衷語も二三ある。

トウブラ (とうなす・ぼうぶら) 周防柳井町

ボウチャ (ぼうぶら・かぼちや) 石見邑智郡

ボンクッ (ぼうぶら・なんくわ) 近江栗太郡

覆者はキンクッ (紀伊有田郡) との折衷かも知れない。蠻瓜の訛といふ説もある。

ナンキンウリ (大阪の昔) ナンキン (京阪・播磨・中國・四國・九州) ルスン (山形) ロソン (同) チョウセン (高松市・土佐) カラウリ (豊後・北丹後) トウナス等、いづれも外来植物たる事實を語るものである。「本草綱目啓蒙」には、カボチャボウブラといふ名が見える。カボチャは *Cucurbita* で、國名である。今、カボチャと言ふのは、カボチャボウブラの下略だらう。従つて、ボウブラが先で、カボチャは後でなければならぬ。「物類稱呼」に「江戸にて先年はぼうぶらといひ、今はかぼちやと云」とある。

ボウブラとカボチャとは元來違つたものである。「倭漢三才圖會」の繪を見ると、ボウブラは圓いもの、

南京瓜 (カボチャ・瓜、厨茄子とも) は細長いものである。「本草綱目啓蒙」にも次の様にある。

南瓜 ボウブラ 京師ニテハ誤テ、カボチャト呼、瓜形圓扁ニシテ堅ニヒダアリ、初ハ深綠色、熟

スレバ黄赤色、筑紫ニ産スル者ハ形甚大ニシテ徑リ尺餘ニ至ル、一種形長ククビアリテ壺ノ形、如

ニシテ深綠色又熟シテ黄色ニカル者アリ、是ヲ、トウナスビト云、一名カボチャ、カボチャボウブラ、ナンキンボウブラ

牧野博士の命名によれば、ボウブラは

cucurbita moschata, Duch, var, *melanocarpa*, Mak. であり、カボチャ、一名、クウナスは *cucurbita moschata*, Duch, var, *toona*, Mak. である。長崎市では、扁圓なる物をボウブラ、中のくびれた瓢型の物をカボチャと區別して居る。「浮世床」に、

土龍「女郎のは色事。地者のは戀路と云物だ。色戀と一絡に云けれど。色と戀とは苣蒲と杜若

松「眞鳥賊と鯛鳥賊ほど違ふのは。おいら風情の色戀だの

竹「蕪南瓜と東埔菜程違ふのは。新田の兄の色戀か

とある。これで見ると、文化頃の江戸ではクウナスとカボチャにも區別があつた様だが、よく判らな

カルサン (山袴・野袴・もんべ)

ポルトガル語 *calção* である。カルサン (長野・美濃・三河・丹波・三重・長崎市) カルサ (紀伊日高郡) カリサン (秋田・美濃・越前) キ・ラサン (甲斐) などと言ふ。京都市では、踵を思寄せたと見えて、カカトサンと言ふ。

カー (ル (ストーブ))

オランダ語 *kachel, kagehel* である。長崎市でいふ。盛岡市でも維新前後には言ツたが、今は廢語となつた。

ターフル (テーブル)

オランダ語 *tafel* である。ターフル (長崎市、昔の盛岡市) タブル (安藝) タプロ (広島) 等といふ。大分縣大分郡では、机をターフルといふ。長崎市では意味を轉じて西洋料理をいふ。

パッテラ (ボート)

ポルトガル語 *batela* である。種子ヶ島、維新前後の盛岡にあつた。長崎・薩摩ではパッテラ。

バンコ (縁臺・腰掛・床机)

ポルトガル語 *banco* である。備後・安藝・伊豫・筑前・筑後・佐賀・長崎・薩摩にある。長崎市で

は、腰掛のみならず、踏臺をもバンコと言ひ、腰掛バンコ、タカンバンコと區別して言ふ事もある。

横濱では、椅子職工をバンコヤといふ。

フルイト (汽笛)

オランダ語 *fluit* である。長崎市のフルイト、フロイトは今は廢語とあるが、伊豫屋桑郡のフルイト (工場の笛) は今も使はれてゐる。フィットリ (高松市) フイト (紀伊日高郡) フィートロ (広島) フェトラ (周防柳井町) フルル (香川多度津町) などは、フェ、又は缶の擬聲を聯想して、變に訛つたらしい。

フラフ (旗)

オランダ語 *vlag* である。和歌山・周防・伊豫・豊後・長崎市にある。伊豆・志摩・広島ではフラホ、岡山市ではフラホーと訛る。傭中では廣告の旗だけ言ふと見えて、廣告と譯してある。土佐では、五月の節句に大きな旗を立てる。これには金太郎や養老の龍などの繪が書かれる。のぼりとは全く別のものである。この旗をフラフといふ。

ポットル (鉛筆)

静岡方言。オランダ語 *potlood* の訛。

ヒリョーズ（雁もどき）

ポルトガル語 *tilos* の訛。ヒエシ（薩摩）ヒリョーズ（伊豆・美濃・備後）ヒリョーズ（沼津・大垣・備中）ヒリョーズ（相模）ヒリョーズ（播磨）ヒロウス（大阪市・神戸市）ヒローズ（備前）ヒロス（丸龜・長崎市）等といふ。

アブラ（馬鈴薯）

オランダ語 *wand appel* の上略。秋田縣でアフラ、アブライモ、アンブラ、アンベライモと言ひ、茨城縣多賀郡でアブライモ、カンブライモと言ひ、磐城棚倉町でカンブラ、カンブラエモと言ひ、栃木縣那須郡でカンボライモと言ふ。高野長英の「二物考」に「奥地の方言アブラは蘭名アールドアップルの略言なり」とある。この「奥地」といふのは、長英の郷里水澤（舊仙臺領・今岩手縣）を指すのではないかと思ふが、今水澤にあるかどうかは明でない。

オランダイモ（播磨・長崎市）カラエモ（宮城）テウセンイモ（奈良）トウイモ（上總）ナンキンイモ（佐賀）といふ名は、いづれも、馬鈴薯が外来植物たる事實を雄辯に物語つてゐる。ジャガタライモも *Jacatra* (*Batavia* の古名) から來た名である。バレイ薯も馬來薯の訛だといふ説がある。臺北市でマーレンツァー、廣東系でマリー・ナンシャといふ。

ドンタク（日曜日・休日）

オランダ語 *zondag* の訛。富山・滋賀・徳島・長崎などにある。常陸潮來町で女郎買をドンタクといふのは笑はせる。出雲で烏打帽をドンタク、大分縣でもドンタク、ドンタク帽、ドンタク帽子といふ。伊勢度會郡では綿入絆纏をドンタクと言ふ。これはドンブク（道服）から間違へたらしい。

第三節 唐音語

いはゆる漢語も廣義の外來語ではあるが、その数があまり多いので、普通、外來語の範圍外に置き、たゞ、唐音語（宋音・元音・明音・清音）だけを外來語として待遇する慣習になつてゐる。この方面の研究は、南蠻語の研究に較べて、甚だしく振はない。「國語科學講座」も沈黙し、前田氏の「外來語の研究」も西洋語に限られて居る。しかし、古賀十二郎氏によれば、長崎方言中の唐音語は五九三語で、ポルトガル語・オランダ語（切支丹用語を含む）の合計よりも多く、大槻博士によるも、唐音語は南蠻語よりも多い。

唐音語が日本に輸入された時代は、前後二期ある。第一は鎌倉時代初期、禪宗の僧侶の歸朝、又は歸化に伴はれたもので、これは宋音である。第二は慶長以來、支那の貿易船によつてもたらされたも

ので、明清音である。第一に屬するものには、禪宗用語が特に多い。今、易林本節用集から宋元音と覺しき佛教用語を抜き出してみよう。

衣鉢侍者(イフシシヤ) 維那(イノ) 楞嚴頭(レンゲンデウ) 頂相(チンサウ) 聽叫(チンキョウ)
炭頭(トンデウ) 師兄(スヒン) 禪和子(ゼンバス) 乘拂(ヒンホツ) 兄弟衆(ヒンデイシユ) 淨
頭(シンデウ) 請客侍者(シンカジシヤ) 直歲小師(シツスイシヨウス) 行堂(アンドウ) 行者(ア
ンジャ) 副寺(フウス) 嚴頭(ゲンデウ) 塔頭(タツチウ) 下火(アコ) 行脚(アンギヤ) 和尚(ヲ
シヤウ) 監寺(カンズ) 都寺(ツウス) 都維那(ツウイナ) 賣僧(マイス) 飢經(フギン) 香經(カ
ンキン) 普請(フシン) 典座(テンソ) 生飯(サンバ) 首座(シユソ) 知客(シカ) 請客頭(シン
カチウ) 陞座(シンゾ) 鉢盂巾(ホユキン) 拂子(ホツス) 破了(ホレウ) 補綴(ホトツ) 編綴(ヘ
ントツ) 直綴(チキトツ) 表背衣(ヘウホエ) 束司(トウス) 燭桶(ソクツウ) 鈴(リン) 磬(キ
ン) 卓子(シヨク) 椅子(イス) 廚子(ツス)

これらが殆ど全部、禪宗用語である事に注意すべきである。佛教語は吳音で讀むといふ事は、禪宗には必ずしも當てはまらない。禪宗には二十四派あるが、その開山は、いづれも、宋又は元に留學して歸朝した日本僧、又は宋元から日本に來朝した支那僧である。「和尚」といふ字は、禪宗でフシヤ

ウ(宋音)、眞宗律宗でフジャウ(吳音)、天臺宗でクワシヤウ(漢音)と訓むが、今世間一般にはフシヤウが通用してゐるのだから、言語上に於ける禪宗の勢力は大したものである。蒲團も禪宗用語だと言つたら驚く人があるかも知れないが、これは一名禪板と言ふから、もと座禪を組むとき、尻の下に敷く圓い座蒲團であつたと見える。それが、追々、四角い座蒲團、數蒲團、掛蒲團と發展して行つたのだらう。

宋音の言葉は、衣食器具にも多く見出される。

油燭、焙爐、段子、亭、挑燈、菱花臺、羊羹、肚脫、紅調羹、紅糟、餛飩、溫餅、胡羹、暖簾、暖
席、饅頭、卷餅、牛黃、孔方兄、火爐、火踏、火鈴、火箸、杏子、杏仁、作法紗、散羅荷、繡羅荷、
銀杏、脚榻、脚陷、香匙、繡子、蒸飯、帽子、水圍、速香、薄荷

以上は全部、易林本節用集(慶長二年)にあるもので、慶長以前に輸入された唐音語である。だから、今日の北京音と違ふものがあつても、不思議はない。行火、行宮、行在所などは、上半分だけ宋音で讀み、下は漢吳音で讀んだものである。無形の事物には宋音は極めて少ない。易林本節用集からは、わづかに、胡亂、暖氣を挙げ得るだけである。

宋音の言葉は僧侶に伴はれて來たから、寺の所在地を中心として擴まつたらうが、慶長以後、貿易船によつて運ばれた唐音語は長崎を中心として擴まつた。この方は、佛教の後援が無かつたために、長崎限りで終つたものが多い様である。私の任務は、方言と外來語との關係を明にするにあるが、あまり分布の狭いのは省く事にしてある。次に、二三の唐音語について、分布を調べてみる。

ショク(卓、机)

卓の宋音である。易林本節用集に卓^{ショク}子、左註にツクエナリとある。「書言字考」にも卓^{ショク}子、「日本館譯語」には卓を「少谷」と譯してある。「太平記」に「笈の中より小硯取り出し、卓の上に立つたりける位牌の裏に一首の歌をぞ被書ける」とある。佛前に供へて、香華を載せる唐机を言ふのが元であるが、今は唯の机をいふ。ショク(盛岡の昔・常陸・上總・相模・佐渡・甲斐・伊豆・美濃・尾張・紀伊・岡山・大分・日向・島原・鹿児島)ショーク(島原)ソク(薩摩)ショクデヤー(備後)ショクケイ(近江)ショクイ(信州川中島)ショクエ(常陸・佐渡)などいふ。ショクエは、ショクとツクエとの折衷語である。栃木縣河内郡のショクバ(机場・教室)も面白い。

南島にもある。シュク(首里・與論島)シク(沖永良部島)スク(首里)スクー(國頭郡)スクダイ(黒島)シュクダイ(宮古島)スクデ(喜界ヶ島)シュクデ(奄美大島)スグダイ(與那國島)ソクデ(名瀬町)等。これは支那からの直輸入ではなく、日本語になつた後、薩摩を通つて這入つたと考へた方がいい。つまり三國傳來である。

フユキン(布巾)

甲斐南巨摩郡飯富でかう云ふ。易林本節用集に鉢盂^{フユキン}巾とある。宋音である(現代北京音はボユチン)。「書言字考」には「鉢盂巾 沙門覆鉢巾也」とある。つまり、前のショクと同様、佛教語である。多分、禪宗語だらう。石見・廣島・長門・筑前・豊後・長崎・肥後・甲斐でフイキン、若狹・大分市・播磨・小豆島でフキンと言ふ。標準語のフキンは是を更に訛つたものである。つまり、この言葉は、ホユキンVホイキンVフイキンVフキンVフキンと四轉したものである。美濃・石見・島原・天草・鹿児島では、拭き布を聯想したと見えてフキノとして居る。

ポイシン(袖無)

ポイシン(佐賀・島原)ホーチン(廣島)ボンシン(駿河・宇和島・大分)ボンチン(佐渡・靜岡)ポント(島原)ハイチン(長崎市)などと言ふ。背心の宋音だらう。現代の北京語は Pong-tien である。「大言海」に僧侶の服の一種とある。

ホイクウ(乞食)

東北全部・千葉・新潟・富山・京都・兵庫・中國全部・四國(徳島以外)・福岡・大分・長崎にある。慶長八年の長崎版日葡辭書にホイタクスル(乞食する)といふ動詞が見えてゐる。慶安三年の「かたこと」にも、鉢ひらきの次に「陪堂を○はいと」とあり、その續篇と自稱する「浮世鏡」にも「はいと 陪堂也、乞食」とある。陪堂をホイタクと訓むのは宋音である。ホイタクは元禪宗用語で、客僧が僧堂の外堂に陪して食を受くるを言ふ。庭訓往來に「禪家方者相伴邇齋之僧、陪堂、外僧、堂輩」とあるのは、原義通りの使ひ方である。それが轉じて、乞食僧の意となり、次いで唯の乞食にまで及んだ。物貰ひの名稱には、勸進・禪門・鉢開・乞食・道心坊主などがあるが、何れも、佛教から出た名である。陪堂もその一つに外ならぬ。陪堂には、又禪家の飯米といふ意味もあるが、それは轉義である。乞食のホイタクを、ホガヒト、ホガヒト、ホギトで解かうとする人があるが、假名づかひが違ふ。日葡辭書にホイタクとある。この頃までは、開口のタクと、閉口のトウとは、發音上區別があつて、混同する事は絶対に無かつたのである。

佐渡・美濃黒川村・日向鼓川では、特殊部落民の一種をホイトといふ。美濃のホイトは竹細工をやつてゐる。日向のホイトは舞曲を業とし、タコタンとも呼ばれる。伊勢のお杉・お玉もホイトの娘であつたといふ。

アイヌ語でも、乞食をホイトといふ。これは東北方言から這入つたのだらう。つまり、この言葉は支那から日本へ、日本から蝦夷へと、三國傳來したわけである。

キビシ。(急須)

急燒の支那福建音なりと「大言海」にある。これを方言扱ひにするのは不當である。東京市を始として、一道三府三十七縣に分布して居る。無い所を挙げた方が早い。群馬・滋賀・鳥取・廣島・愛媛・高知の六縣だけは、急須のキビシ。が在るといふ報告に接しない。土佐幡多郡には、キビシ。は在るには在るがそれは燭徳利の事である。廣島縣豊田郡でも同様であるらしい。元來、支那で急須といふのは酒を煖める器である。「三餘贅筆」に「吳人、酒を煖むる器を呼んで急須と爲す」とある。して見れば、燭徳利といふのは、却つて、原義を傳へたものかも知れない。なほ、志摩鳥羽町でキビシ。といふのは、客用の小さい茶つぎ土瓶で、急須とは別であるといふ。

ハンチン。(甘藷)

ハンチン・ンム(首思)ハンシン(徳之島)ハンスン(奄美大島)ハヌス(同)等は、いづれも蕃薯の南支那・臺灣音ハーンツの訛である。長崎縣諫早町のハッチ、ンもさうだらう。島原半島には、ハチリ、ハチル、ハチンといふ所もある。昔の大阪や江戸ではハチリハンと言つた。「浮世風月」三編

下に「私も初は何の事を申すかと存たれば、八里半とは九里に近いと申すことだと」とある。しかしハ・チ・エンといふ言葉が先に無かつたら、こんな洒落も案じ出されはしなかつたらう。

カライモ（安藝・山口・伊豫・土佐・九州全部・沖縄）トウイモ（山口・香川・伊豫・福岡・大分・宮崎・佐賀・長崎）トウジンイモ（岡山）臺灣芋（宇和島）琉球芋（和歌山・中國全部・香川・徳島・愛媛・福岡・大分・長崎）などといふ名は、この芋が外來植物たる事實を語つて居る。事實、沖縄へは、慶長十年に野國總督が支那の福州から之を傳へ、薩摩へは、寶永二年に前川利右衛門（一説に織川右衛門）が持ち來り、中國へは、石見の萩代官井戸平左衛門が傳へたものである。元禄十二年には、和泉國大島郡久世村に移植した事があつた。その頃、京都ではアカイモ、又は、リウキウイモと呼んだ。（書言字考）

タツチュウバ（墓地）

遠江・駿河にある。伊豆ではタツチョーバ。塔頭の宋音である。塔頭とは、禪宗で、祖師の塔のある處をいひ、轉じて、禪宗の大本の境内にある小寺をいふ。平斐の「裏見家話」に、「たつちう」を卵塔と譯してある。信州のタシ・バ（墓所）は他生場を聯想したと見える。

ケンズイ（間食）

京都府・滋賀・奈良・三重・和歌山の各府縣で三食以外の間食をケンズイといふ。字には、飢水・蘭飲・間水・建水・勸隨など書くが、實は間食の中古音だといふ「閑田耕筆」の説に従ふべきである。（間食の説といふ「大言海」の説は悪い）。もとは禪僧の言出した言葉に違ひないが、貞享・元禄の頃は早くも農家で晝食をケンズイと言つて居た（籠耳草子・合類大節用集）。昔は二食であつたから、晝飯が即ち間食であつたわけである。パンズイ（晩食）もある。

壹岐のケンズイ、薩摩の東南方村のケンジ、ケンゼ、沖永良部島のキンジ、喜界ヶ島のキンディー、沖縄本島のキンズイは、何れも、普請の時に近所や親類から見舞に酒肴を持つて來ること、又は、その酒肴をいふ。出雲能義郡のケンズイは、新築祝に贈る品物とあるから、酒肴には限らぬと見える。永徳二年（二〇四二年）の春日社焼失記に「けんすい六升、御供二前、御奉行より大工に給はる」とあるから、もと京都の言葉であつた。「物類稱呼」にも、酒の條に、

又畿内の番匠の詞に間水けんすいといふ。今は「けづり」ともいふ。江戸にても番匠は「けづり」と云。…又西國にて「けんすい」と云は、灸治する節、酒食を饗するをいふ

とある。間食のケンズイと、大工に供する酒のケンズイと、分布も時代も意味も違ふので別語と見做す人（大槻博士など）もある。

大隅肝屬郡高山村のケンズイは、一寸した御馳走、腰をかけて食べる位の食物とあるから、近畿のケンズイと同類で、しかも分布は孤立して居る。

マイス（賣僧）

賣僧をマイスと訓むのは宋音である。この點は疑問が無いが、おベツかをマイスといふのは、賣僧の轉義かどうか、多少疑問がある。分布は、沖繩・九州一圓・伊豫青島・薩賀・三重・愛知・新潟・茨城・山形にある。マエス、ミヤース、ミヤス、ムシ、メーシ、メース、メシ、メス、メソ、メンス、マイサ等と詛る。マイスを言ふことを、トル、カクル、コク等といふ。「昔言字考」に求媚をマイスと訓じてあるから、元祿時代の京都語であつた。

第四節 朝鮮語

小倉博士の「國語特に對馬方言に及ぼした朝鮮語彙の影響」（方言、二ノ七）には、外來語七十五を擧げてあるが、この内十三は地名、二は地名から普通名詞となつたものである。又薩語も多く、四十九語に及ぶ。現在行はれて居る二十六語の内、對馬以外にも在るものを次に擧げてみよう。

パッチ（股引）

『事林の訛』「倭訓栞」にも、パッチの條に「袴袴の類にいふ。朝鮮語也といへり。或は楊袴を譯すとある。今、パッチ（山形・京都市・近江・和歌山・大阪市・兵庫・川雲・山陽道・土佐・長崎）パッチ（伊勢・志摩・和歌山・大阪・兵庫・香川・徳島・上佐・薩摩）パッチイ（薩摩・種子ケ島）パチ（今治）パチ（志摩）などと言ふ。山形縣を除けば、近畿以西に限られて居る。たゞし、江戸では賣屠頭使はれたさうである。

シケ（背負子）

薪や炭など重い物を運搬する時、背中に梯子みたいな物を背負つて、その上に荷をつける。休む時は、少しのけぞれば、梯子の脚が地に着くから軽くなる。歩く時は前屈みになつて歩くから、梯子の脚は邪魔にならない。關東地方で、シヨイコ、シヨイバシゴ、ヤセウマ等といふが、それを對馬でシケといふ。小倉博士によれば、これは朝鮮語チゲ（支械）の訛である。天保十二年の序ある「象背紀聞拾遺」に「又州人彼國ノ語ヲ誤リ傳テ呼モノアリ。チケイ、コレヲシケイト云」とあるさうである。州人とは對馬人の事である。言葉ばかりでなく、物も朝鮮から輸入したのだらう。越前でシケ、美濃揖斐郡でジガイといふ。たゞし、後者は「岐阜縣方言集成」に「藥製荷負用」とあるから、物は少し違ふかも知れない。

サハチ（井・大皿）

「伊呂波字類抄」「書字考」「明良洪範」「好色三代男」「饅頭屋本節用集」に砂鉢、易林本節用集に沙鉢とある。今、サハチ（青森・岩手・秋田・山形・石川・山雲・石見）サーチ（岡山・土佐）サラチ（土佐）サワズ（山形）などと言ふ。普通はサラハチ、又はアサハチの訛とされて居るが、小倉博士は朝鮮語の砂鉢（*sa-bat*）と關係があらうと言つて居られる。しかし、九州に無いのは、この説の弱みである。

テクリ（筒袖の上着）

朝鮮語 *teuk-ri* の訛。對馬・壹岐・筑前・豊前・豊後にある。襦袢・筒袖（福岡市）肌着の一種、手首や胸に當る所に紐を附けたもの（筑前朝倉郡）半天（豊前樂上郡）筒袖の一種、袖口の窄んだもの（大分縣大分郡）筒袖の上着、襟を折らざるもの（壹岐）など報告されてゐる。

ホシヤ（巫）

「倭訓栞」に「ほさ」の條に「對馬にて巫覡の類の稱にいへり。祝の義なるべし」とある。今も巫女をホサドンといふ。大分縣では、神主をホシヤ、ホシヤー、ホシヤドン、ホシヤードン等といふ。小倉博士は、巫覡の朝鮮方言 *pe-sa* と關係あらうと言はれた。しかし、私は半信半疑である。

逆に、日本語から朝鮮語になつたものとしては、タビ（足袋）テンマ（傳馬）クヅ（靴）ケダ（下駄）クルマ（荷車）ヤサミ（刻み煙草）ノリカエ（乗換）ジンケンボイ等がある。ナンボ（洋燈）サブン（石鹼）ツッポ（帽子）等の洋語も、日本語を経由して這入つたものと認められる。甘藷のゴグマは、古書に「古貴爲麻」「古々伊文瓜」とあつて、これは對馬方言の「孝行藷」から來たとは小倉博士の説である（外來語研究、三ノ一）

第五節 梵語

外來語としての梵語は特異のものである。明治になるまで、日本人にして印度に行つた者は一人も無く、印度人にして日本に來た者も一人も無い。従つて、口から耳へ傳つた印度語も有るはずがない。たゞ、佛教用語としての梵語が支那で漢字に音譯され、それが佛教と共に日本に輸入されたまでである。だから、外來語としての梵語は佛教用語、及びその轉義に限られて居る。アバタ（痘痕）ソラ（空）ツヅミ（鼓）ハタ（機）サイ（博奕の）ヒチリキ等に近い言葉が梵語にあるからとて、これらは佛教用語ではないから、梵語であるとは言はれない。たゞし、マラなどは僧侶の隱語として説明される。バカ（葛何、愚痴の意）もこの類か。昔の日本人の梵語に關する知識は「翻譯名義集」を出な

かつたのだから、外來語としての梵語も、この書に限られて居ると見てよい。

梵語は佛教の専門語だから、本来「外國語」であつて、「外來語」ではないはずだが、キリシタン用語と違つて、國民生活に浸潤する事久しく、かつ深く、その結果、今では國語の一部分を成してゐるものが多い。

サンマイ(墓場)

墓場を、サンマー(長門) サンマイ(下總・若狹・美濃・和歌山・播磨・香川・徳島)・サンマイヤ(美濃) サンマエ(美濃・尾張) などと言ふ。以上は墓場であるが、火葬場をサイマイ(福井市) サンマイ(越中・越前・若狹・美濃) サンマエ(和歌山) などと言ふ所がある。淡路では、屍體の埋葬場をサンマ、又はサンマイといひ、石塔を建てる墓場とは別の場所にある。「親鸞上人繪詞傳」に「島邊野の南、延仁寺の三昧に送りて火葬し奉る」とある。「書言字考」に「葬^{マヤイ}場、本朝俗斥^{マヤイ}葬所云爾」とある。サンマイは梵語 *śaśaṭṭhi* で、三摩地とも音譯し、定^{サマ}と意譯する。入定の地といふ意味で、墓場や火葬場をサンマイ場と言つたのだらう。

ダビ(葬式)

葬式をダビ(首里)ダビ(八重山)ダキ(沖縄縣國頭郡)ダミ(津輕・秋田・山形・上總・長野)

「ダミオクリ(青森市)ダミコ(津輕・秋田)ダミダシ(津輕・秋田)ヤラダミ(津輕)ダンビ(尾張知多郡)ダンベ(同)などと言ふ。火葬には限らない。「下學集」に「茶^チ毘 二宅共唐音、葬送之義」とあり、易林本節用集にも「茶^チ毗 送喪」とあり、又「葬^{マヤイ} 茶^チ毘」とあつて、足利時代の京都では、ダビを葬式と全く同じ意味に使つて居た。なほ、「下學集」の唐音説は誤である。茶とは字が違ふ。長井博士の「梵語と國語(國語科學講座)」に「これに關連、關泉多の音譯があつて焚燒の義なりといひ、正しくは關泉多であるといふより見れば、巴 *jaṇṇa* (燒かれたる)の音譯であらうか」とある。

ビクニ(尼)

パーリ語で、男の僧を *bhikkhu* とし、女の僧を *bhikkhuni* とし、比丘、比丘尼と音譯してある。しかし、日本では比丘の方は殆ど使はない。方言では、志摩の船越村にビキ(僧)があるだけである。比丘尼の方言には、オビー(信濃・三河・長門)オビーサ(三河・長門)オビーサマ(三河)オビーサン(信州・福岡)オビキサン(越前)オビク(尾張)ビー(三河)ビク(信州・飛騨)ビクサン(大和・和歌山)ビクニ(信州)ビクニン(出雲・昔の京都・丹波通辭)ビクン(福岡築上郡)ブクニ(昔の京都)などがある。

昔の子供は、男も女も、髪を剃つたので、男の兒は坊主、女の兒はアマ、又はビクニと呼んだらし

い。ビクニ系には、敬稱・愛稱から、賤稱・罵稱まであり、語形も色々ある。今は比較的原形に近いのだけ挙げる。ビクニ（長野・三河・但馬・周防・肥後）ビクニコ（備中）ビクニコ（美作）ビクニノコ（美作）ビクラ（伊勢）ビクニン（佐渡）ビクン（肥後）ビク（信州・甲斐・静岡・伊勢・但馬・石見・備中・廣島・島原）ビクタ（三河）ビクター（静岡）ビク・チ（甲斐）等。これらは尼の意ではない。女の兒の意である。大人の女を罵るのに使つてゐる所もある。

ダンナ（旦那）

梵語 *dhana-pati* は、施主といふ意味であるが、これを音譯した檀那・旦那は色々の意味に使はれてゐる。先づ金持といふ意味で、ダンナサマ（越後）ダンナシ（大和・三重・和歌山・香川・愛媛）ダンナシユウ（山形）ダンナシ。（山形・越後）ダンナハアン（富山）ダンナシ（淡路）ダンナシウ（越前）といふ所があり、地主をダンナ（島原半島・日向）ダンナン（島原）といふ所があり、武士をダンボ（宮城）ダンボウ（岩手・氣仙郡）といふ所があり、巡査をダナサン（佐渡）ダンナ（日向）ダンナサマ（越中・加賀）ダンナハン（越前・若狹）ダンナン（越前）ダンボ（岩手）ダンボウ（岩手）ダンボサマ（宮城）といふ所があり、役人をダンボ、ダンボウ（岩手）といふ所があり、醫者をダンサン（出雲）ダンナサマ（山形の昔・天草）といふ所があり、神職をダンサン（出雲）といふ所

がある。ダンナが新鮮な感じを持つてゐた時代には、かう呼ばれる事は、よほど名譽な事であつたに違ひない。だから、ダンナと呼ばれる資格ある者は、金持・地主・侍・巡査・役人・醫者・神主等に限られて居たのである。近頃の東京の様に、大人の男さへ見ればダンナと呼び掛けるのは、濫用であり、阿諛である。

第六節 アイヌ語

アイヌ語は、文法上、日本語とは全く違つたものである。アイヌ語が問題になるのは、單語の貸借といふ點である。この點に於て、アイヌ語と日本語（方言を含む）とは密接な關係がある。しかし、アイヌ語から日本語になつたものは少なく、日本語からアイヌ語になつたものは多い。これは文化の程度が違ふからである。

金田一博士の「アイヌ語と國語」（國語科學講座、第五輯）には、アイヌ語から國語となつたものとして、三十一語を挙げてあるが、その内、三語は民族の名（アイヌ、エゾ、エミシ）、十七語は動植物名（主として北海道の特産物）、十語は、國語として一般的に用ひられない生ま生ましいアイヌ語、殘一語は「夫木抄」にあるコサである。これによれば、金田一博士は、民族名と動植物名とを除く外は、

アイヌ起原の日本語を認めない原則の様に見える。

アイヌ語と日本語と關係がある場合でも、どちらが本家かを決定するのは容易でない。アイヌには文字無く、書物無く、従つて、文獻による歴史的研究が不可能だからである。たゞ、日本側に用典のあるものは、比較的、決定が容易である。日本側にも記録の無いものは、方言分布の状態や語彙貸借の條件を考慮してきめる外に方法が無い。

ケリ(靴)

樺太・北海道・青森・岩手・秋田・山形・佐渡で、西洋風の靴をケリといふ。たゞし、佐渡のケリは維新前後に行はれた流行語で、北海道に出稼ぎした佐渡人が珍しいケリを穿いて歸つたのから弘まツたものであるといふ。盛岡でも、慶應年中、フランス式の練兵をした時、役師(小隊長格)どもが穿いた靴をケリと言つた。今は廢語である。

鮭の皮で作つた靴を、北海道アイヌ語でケリ、又はケイレと言ひ、樺太アイヌ語でキロと言ふ。この鮭の皮靴は、北海道に居る和人も穿き、その名もやはりケリと呼んでゐる。このケリは、アイヌの古詩ユーカラには出て來ないので、金川一博士は日本語起原と考へておいでの様だが(國語科學講座にも無い)、私は次の様な理由によつて、アイヌ起原に違ひないと考へる。(一)分布が佐渡以北に限

られてゐる、(二)佐渡や盛岡には明治維新前後に初めて現れた言葉で、固有の方言ではない、(三)日本側の古書には全く見當らない、(四)アイヌ語としては、早く嘉永七年の「蝦夷語箋」に、ケリもキロも見えて居る、(五)鮭の皮靴そのものは蝦夷の特産物であつて、日本に無く、従つて、日本名のあるべき道理は無い。

ト・カリ(海豹)

アザラシの語源は判らないが、ト・カリの方は確にアイヌ語源である。北海の特産物だから當然である。北海道・樺太の和人が使ふ。「蝦夷語箋」にはツガリ、つかりとある。

トナカイ(馴鹿)

「蝦夷語箋」に「鹿のごときけもの ツナカイ、カラント」とある。樺太の特産物だから、樺太アイヌ語起原である事は論ずるまでもあるまい。

ト(湖)

北海道の湖岸地方や、樺太大泊町で使ふ。發音がやさしいので、原語の地名を採用するのと同じ様な心持で採用したのでらう。

シコロベ(黄栗)

秋田縣で、シコロ（各郡）シコロベ（山本郡）シコロヘ（北秋田郡）といひ、樺太真岡でシコロといひ、盛岡でシコロキといふ。「御國通辭」（寛政二年、盛岡）には「しつこのへ」とある。アイヌ語では、實をシケレベといひ、櫛をシケレベニといふ。日本には、キハダ（黃膚の意）といふ名が別にあるから、シコロベはアイヌ語から來たのであらう。「本草啓蒙」には西國米とある。實を言ふ。

ホッキ

貝の名。馬鹿貝の大きい様なもの。岩手縣などで言ふ。アイヌ語ホッキセの訛である。pokは下、女陰の意、セは貝の意である。「蝦夷語彙」にはホッキセイとある。

ネップ（臘臍臍）

盛岡でネップといひ、釜石町でメップといふ。アイヌ語 *omep* の上略である。umai とも言ふ。この獸の臍や陰部は藥用として支那に輸出された。支那では、アイヌ語をそのまま臘臍と音譯した。これが漢方として日本に逆輸入され、日本ではオットセイと發音し、獸の名をば臘臍獸と言つた。道春の「多識篇」に「臘臍獸 字仁宇 海狗」とあり、臘臍の註には「字仁宇乃僞曾又云、字仁宇乃多計里」とある。

ワッカ（水）

青森縣・秋田縣の樵夫には山で使つてはならぬといふ言葉が幾つかあつて、それに代るべき忌詞が發達してゐる。これを山詞といふ。この中にはアイヌ語から來たものが二三ある。津輕で水をワッカといひ、上北郡で魚をワッカムグリ（清水の意）といひ、秋田縣仙北郡で、雨水をワッカ、清酒をキヨワッカ、濁酒（方言メグリザケ）をメグリワッカ、小便することをウチワッカヘダル（内水降る意）、笠をワッカブク（雨蓋）といふ類である。

ヘダ（犬）

「東京人類學會雜誌」第四十四號に、南津輕郡山形村大字沖浦邊の山の者の使ふ忌詞が出て居る。その中、ヘダ（犬）ワッカ（水）カクミ（杓子）はアイヌ語と共通である。犬のアイヌ語はセク。津輕方言では、凡てセはへ、頭音以外のタはダとなる。

ホロ（大）

青森・岩手・秋田・山形には、所々にマタギ（狩人）の部落がある。例へば、秋田縣北秋田郡阿仁合町字根子など、その一例である。眞澄遊覽記、卷三十二に「根子といふ村は皆マタギと稱へて冬獵をする獵人の宿なり」とある。彼等の間には、多くの蝦夷語が行はれて居たとある。同書卷三十二に、北秋田郡十二所町で、菅江眞澄がマタギに逢つた記事がある。

見目^{みめ}ことがら清けなる女のかたらひて得まじりたるを、皮衣著たる荒雄ら犬引き具したるが來か^{きた}りイみて、よき女よ、サツタテをホロにしてネ、ツブをケアハセたしと言ひて、はと打笑ひて過ぎたり、其等は又鬼^{またき}とて獵人なり、其タマギ言葉をもて言ひける也。ネ、ツブは女の元、サツタテは雄の元、ホロは大なるを謂ひ、ケアハセルはまきはへることをいふ。彼等が業には雪降れば深山に分け入りて山羊^{おとこ}を追ひ、春のサネ雪をカチキに踏みて熊を追ひ、手刀^てでふものにて突くめり、……熊をイタチ、猿をサネ、鹿をカゴ、山羊^{おとこ}をケチなど謂ひて山に入ればそれ〴〵忌詞多かりけるとそれ等が語りぬ

ケアハセは日本語であるが、ホロはアイヌ語ボロに通ずる。なほ、ネネツブやサツタテはアイヌ語に無いかどうか金田一博士にお聞きした所、思ひつかないとの御返事であつた。

アキアヂ（鹽鮭）

鮭を鹽して、こぬかに漬けて、乾したものを、盛岡でアキアヂといふ。こぬかの着いてゐる點が鹽引と違ふ。北海道産である。アキアヂといふ言葉も、北海道語（アイヌ語とは言はない）を眞似たのだと土地の古老が言つて居る。宮城県や福島縣でも、鹽鮭をアキアヂ、又はアキヤヂといふ。秋田縣平鹿郡のアキアヂを「年内の鮭」と「秋田方言」には註してゐる。これはアキ（秋）といふ文字に

因はれた解釋で、感心しない。奥南部や山形縣にも、鹽引のアキアヂがある。樺太大泊町のアキアヂは鮭である。佐々木長左衛門氏の「アイヌの話」にも、アイヌ語として、アキアンチ（鮭）がある。

さて、アキアヂは、日本語源かアイヌ語源かと、さん〴〵迷つた末、次の様な考に落着いた。鮭のアイヌ語は *chuk oter* である。チュクは秋、テプは魚の意である。直譯すれば「秋魚」となる。

その意味を知つて、北海道の和人は「秋味」と意譯したらしい。その譯語の「秋味」がアイヌ人によつてアキアンチと眞似られた事は、恰も、小豆がアンツキとなり、ミツチがミンツチとなり、ナジミ（馴染）がナンチミとなると同様である。鮭は、東北地方へは鹽漬として送附されるので、東北人は、アキアヂとは鹽鮭の事と覺えてしまつたらしい。つまり、アキアヂはアイヌ語のものではなく、アイヌ語の譯語である。以上が私の今の考である。

X

X

X

以上十一語を見渡すに、鹽語三、動植物（多くは特産物）六、其他二となる。即ち、日本人がアイヌ語を使ふのは、必要止むを得ざる場合に限られて居る事が判る。トー（漕）だけは、やゝ物好きに近い。次に、これらが日本語化した時期を考へてみるに、ケリ（靴）トカカリ（海豹）トナカイ（馴鹿）トー（湖）アキアヂ（鹽鮭）の五語は明治維新前後と思はれる。ワカ（水）ヘダ（犬）は、鹽

語だから、北奥羽の山の者が一般に日本語を使ふ様になり、アイヌ語を知つて居る者が稀になつた後でなければならぬ。即ち、ワッカが水の意である事を、七十、八十の老人だけは幼い時から知つて居るが、五十歳以下の者は教へられて初めて知るといふ過渡期の末期に、忌詞として採用されたのだらう。その時代はいつ頃だらうか。石器時代が今から三千年前であつたといふ者は、近頃の考古學によつて破られた。石器と伴つて用た古錢によつて、その年代が確定され、東北地方では意外に近い頃まで石器を使つて居た事が判つた。又、津輕宇鐵村の蝦夷が風俗を日本風に改めたのは寶曆六年であつた。「工藤家記」に

寶曆六年九月初日、乳井貢御用付廻郷云々、此時外濱宇鐵邊に居る狄どもを皆々人間に取立、髭剃、鬘立させ、女狄は髮結せ、齒染させ、戸數人別帳へ入、宗旨改め、寺持たせ候間、狄とも定にありがたきと、乳井を佛様のやうに覺候とあるさうである。村上島之丞も、その著「陸羽州驛路圖」の宇鐵村の條に、

宇鐵村は寶曆年間まで蝦夷の容貌なり。酋長をクマタカイノ・フルフクイン・ウチレキ・セキリパ・ルウマンアイノ・ソタツイン・クマカイなんどいへる名にてありしが今服従せり

とある。男の名にアイノ（アイヌ、フィン）を附けるのは、北海道アイヌも同様である。率士の濱づ

たひ」の著者、菅江眞澄は、

此の浦はもと蝦夷の末ながら、物の云ひ様異浦にことならず、近き昔とやらんに鬘剃り、頭をそりて、女も文身ならで、そのけちめなし。浦のをさ四郎三郎といふがもとに宿かる

と書いてゐる。この四郎三郎は宇鐵のクマタカインの子孫である。寛文九年の蝦夷蜂起の翌年、津輕藩は、幕命を受けて、北海道を探検した。その時、宇鐵村の四郎三郎と藤崎村の萬五郎を通辯として同行した。即ち、ふだんは日本語で話して居つても、アイヌ語も忘れずに居つた證據である。同じ東北地方でも、入口の方は早く日本化し、奥の方は遅く日本化したらうから、東北地方全體を引つくるめて何時日本化したかを問ふのは愚である。たゞ、宇鐵村は、寛文・寶曆の頃、アイヌ語から日本語に移つたと見て、太過なからう。して見れば、ワッカ（水）ヘダ（犬）の忌詞として採用された時期も、大凡、見當が附く。

かやうに、津輕には近世までアイヌ語が日常使はれて居たにも拘らず、アイヌ語の殘存するものゝ少ない事は意外な程である。忌詞と動植物名以外は絶無であると言つてよい。ケリ（靴）は明治維新前後に北海道から移入された外来語であるし、ト（湖）は北海道の通人が使ふだけで、本州には無い。思ふに、奥羽の蝦夷は和人から「彼は蝦夷である」と指摘されるのを嫌つて、自分を和人に装

ふために、風俗は勿論、言語も努めて日本化し、アイヌ語は一語も使ふまいと努力したのでらう。ただ、本々キの様に、日本語の無い物だけ、仕方なしにアイヌ語を使つたのだらう。アイヌは先住民族だから、東北方言にアイヌ語が多いだらうといふ世人の豫想は裏切られた。それを明にしたのは、消極的ながら、方言學の手柄である。